

## 2021年(令和3年)平山郁夫画伯作品集 「求法の道」作品紹介

本年の表紙は、<sup>きんようくじゃくみょうおう</sup>「金曜孔雀明王」。孔雀は、害虫やコブラなどの毒蛇を食べることから、孔雀明王は人々の災厄や苦痛を取り除く功德がある、と信じられている。明王の法力によって、新型コロナウイルスを退散させてほしいものだ。本作品では、金色の孔雀に乗るといわれる明王が、平山ブルーの中に鮮やかに描かれている。

仏教の始祖である釈迦の生母である<sup>まやぶにん</sup>摩耶夫人は、ある夜、6本の牙を持つ白象が胎内に入る夢を見て釈迦を身ごもった、と伝えられる。<sup>じゆたいれいむ</sup>「受胎霊夢」(1・2月)は、この故事に題材を得たもので、平山画伯はシンプルな構図の中に釈迦誕生の序曲を厳かに表現している。

釈迦は、摩耶夫人の右脇下から生まれたとき、東西南北に7歩ずつ歩き、右手を上げて天を指し左手は地を指して、<sup>てんじょうてんげ ゆいがどくぞん</sup>「天上天下唯我独尊」と言ったと伝えられる。日本には、これにちなんだ多くの誕生仏があるが、中でもここに描かれている「東大寺 仏誕」(3・4月)は、写実性に富んだ天平時代の名作で、香水を受ける灌仏盤と共に国宝になっている。

日本に仏教が伝えられたのは、538年(宣化天皇3年)とされている。当初、<sup>ふつぷつ</sup>仏教を受け入れようとする蘇我氏と、これを拒絶する物部氏との間で抗争となった。「浪速の祓仏」(5・6月)は、日本における最初の仏教受難の有様を描いたもの。蘇我氏は、自主的に「仏」を祀ったものの、災害が多発したため、これは日本の神々の祟りだとされ、反対勢力によって仏像は浪速(大阪)の堀江に捨てられてしまう。その様を平山画伯の言葉によれば、幻想的に描いた、とのことである。

中国の唐代の僧・玄奘三蔵のインドへの求法の旅を描いた「仏教伝来」の成功によって自信を得た平山画伯は、<sup>てんじゆこくまんだら</sup>仏伝に画題を求めた力作を次々に発表していく。「天寿国曼荼羅」(7・8月)もその一つ。天寿国とは極楽浄土の異称。阿弥陀仏が常に説法している全く苦患のない安楽な世界が、憧れの心をもって美しく描かれている。

仏教は、発祥の地、インドから様々な人々によって東方世界へともたらされた。その結果、さらにその奥義を極めようとした人々が発祥の地へ学びに訪れる。その象徴的な人物の一人に玄奘三蔵がいる。<sup>てんざんなんろ</sup>「天山南路(昼)」(9・10月)は、修行を終えて故国へ帰る僧たちを描いたもので、このモチーフは、4年後の1964年(昭和39年)に大作「<sup>くほうこうそうとうきず</sup>求法高僧東帰図」[2006年更生保護カレンダー5・6月作品]へと昇華した。

奥州藤原氏によって、中尊寺が平泉の地に建立されたのは、1105年(長治2年)のこと。ここは<sup>じこう</sup>仏教が日本に伝来し、到達した最終の地と言える。「慈光(中尊寺金色堂)」(11・12月)に描かれた阿弥陀如来を中心とする諸仏は、平安時代後期の作である。平山画伯は、こう述懐している。「作品を描き終えたとき、御仏の慈愛にあふれた世界が思い出され、『慈光』という画題が迷うことなく浮かびました」と。

来る新しい年も御仏の御加護を心より願う次第である。